

読者を縦横に導く、 新たな「目録学」門径の書

古勝隆一著

目録学の誕生
劉向が生んだ書物文化

四六判 268頁
臨川書店
[本体 3,000円 + 税]

秋山 陽一郎

古勝隆一氏の『目録学の誕生 劉向が生んだ書物文化』（以下「本書」）は、「目録学」の開祖とされる、前漢末劉向に関する本邦初の専著である。劉向の学問を概括したものと

しては、我が国ではこれまで池田秀三氏の「劉向の学問と思想」（『東方学報』京都、五〇、一九七八年）が不動の地位にあるが、本書はそれに次ぐ成果となる。^{（注）}

著者の古勝隆一氏には、嘉瀬達男氏や内山直樹氏と共に邦訳した、余嘉錫の『古書通例——中国文献学入門』（平凡社、東洋文庫、二〇〇八年）および『目録学発微——中国文献分類法』（平凡社、東洋文庫、二〇一三年）があり、また現在は京都大学人文科学研究所で、章学誠『文史通義』内篇を翻訳する研究班を主宰している。本書第九章をお読みいただければお分かりのように、いずれも劉向の目録学を理解する上で欠かせな

い著作であり、こうした業績が本書執筆の重要な下地となっていることは想像に難くない。

本書は全一一章構成。まずは以下にその簡目を掲げておこう。

序章 目録と目録学

第一章 劉向目録学のインパクト

第二章 目録学前史——戦国時代から前漢時代における術と学派

第三章 前漢時代の皇帝と学問

第四章 劉向の家系と学問

第五章 『別録』と『七略』

第六章 校書の様相

第七章 『七略』の六分類

第八章 ポスト劉向時代の目録学

第九章 劉向の学を広め深めた学者たち——鄭樵・章学誠・

余嘉錫

終章 書物はなぜ必要なのか

本書の特徴は次の三点に集約される。第一に、軸足を首尾一貫「目録学の誕生」に置く点。第二に豊富な関連研究の紹介。そして第三に研究者と市井を結ぶ平易な文である。

まず、タイトルにもあるように、本書の軸足は「目録学の誕生」にある。ここでいう目録学とは、明の胡應麟『四部正譌』や清の王鳴盛『十七史商榷』で述べられているような弁章し、源流を考鏡す（『校讐通義』という一節に基づく、学術史を記述する学問としての目録学（≠校讐学）である。第二章で『荀子』非十二子篇・『莊子』天下篇・『韓非子』顯学篇・司馬談「六家要指」といった劉向に先行する学派流別に言及し、第四章で楚元王劉交を家祖とする劉向の家系と家学を説明していることなど、いずれも「学術を弁章し、源流を考鏡す」という基軸から決して離れることがない。どこまでも「目録学の誕生」の背景を説明することに徹している。

二劉（劉向・劉歆父子）より前の原初の目録学的記述から、二劉の目録学を継承もしくは批判した後世の論評に至るまで、「目録学の誕生」を説明するのに無駄な章がなく、隙のない構成となっている。

次に、「あとがき」において「執筆に際して心がけたのは、第一に、原資料を多く紹介すること、第二に、先行研究を引用することであった」（二二五頁）とあるように、本書では多くの関連研究が紹介されている。古くは第五章で言及される南宋の王心麟や清の姚振宗、第九章で紹介される南宋の鄭樵や清の章学誠。新しいところでは余嘉錫、姚名達、錢穆、徐興無、徐建委、倉石武四郎、金谷治、池田秀三、戸川芳郎、内山直樹、保科季子、マーティン・カーンら。さらには『漢書』楚元王伝の記述が詳しい理由について楊樹達『漢書所挾史料考』を援引し（二〇四頁）、青木俊介氏の「漢長安城未央宮の禁中——その領域的考察」を紹介しつつ、未央宮全体が「禁中」であったわけではない点を説明するなど（二六一頁）、隣接する関連分野の先行研究まで幅広く取り上げられており、読み手の関心に応じて、次のステップが縦横に示されている。

原資料や先行研究を多数引用するという形は、余嘉錫の『古書通例』『目録学発微』『四庫提要弁証』といった著作にも見

られる。だが、余嘉錫の著書はどこまでも学究の書であり、引用もしばしば長文に亘るのに対して、本書は一般向けに理解しやすいよう、つとめて簡潔平易に書かれている。研究者と市井を結ぶという意味において、余嘉錫の書にはない間口の広さを持つ点も、本書の得がたい特長として挙げられよう。一節あたりの長さも適度に短く、目次の重厚さにも関わらず、まるで本書全体が短いコラムの集合体であるかのような気軽さで読み進められる。

その一方で、気になった点もある。二劉の目録学の根底を支える校書に関する記述が薄い点である。「劉向が生んだ書物文化」という副題からは意外に思えるかもしれないが、本書のうち、二劉の目録学に直接絡むのは第五章から第七章の三章だけとなっているほか、二劉目録学の基礎を成す「校書」部分の記述も第六章のみとなっている。たしかに鄧駿捷『劉向校書考論』がそうであるように、「校書」はそれ単体で一冊の書となりうるほどのボリュームがある主題である。紙幅の都合で割り切つて削つたという事情もあるのだろう。実際、「目録学の誕生」という主題に徹底してフォーカスしたからこそ、本書が一貫性ある明快な内容になっているのも事実である。だが、たとえば唐の殷敬順『列子釈文』は、劉向の列子序録

を題して「列子新書目録」といい、管子序録を指して「劉向『管子新書目録』」という。これにより、「目録」の語の起源は劉向にあり、二劉のいう「目録」とは篇目の「目」と解題の「録」を合わせた言葉であることが窺えるわけだが、この篇目・篇次を定めるところまでを二劉は「定著」と称し、この「定著」された「新書」（新定本）なくして書目は成り立たない。この意味で、書目というマクロな目録学に対する、篇目というミクロな目録学も成立しうるのである。

また、古勝氏自身、「当時、書物のテキストは後世のテキスト以上に内容が流動的で、テキスト間の差違が大きかった」（二四頁）と捉えているながら、二劉校書を「前漢の歴代皇帝の私的なコレクションを整理したもの」（九頁）とその対象を小さく捉えている点についても、重要な部分なだけにもう少し説明が欲しかった。第六章・第四節「序録に見える『中書』」にあるように、二劉は、前漢末の禁中の秘書を「中書」と呼んでいるが、二劉校書はこの「中書」の整理で完結していない。官府・官僚・民間の蔵書の総称である「外書」をも収集・整理の対象としている。評者は定本の作成を二劉校書事業最大のインパクトと捉えている。できれば古勝氏の立場から、この「外書」や新定本を意味する「新書」の位置づけについて、踏み込んだ説明を拝聴してみたかった。このあたりの立場の

違い(二〇五頁)が、評者の視点「中国上古の学術史から見た二劉」と、古勝氏の視点「中国中古の学術史から見た二劉」とで、見える景色が違うことに起因しているように思えたからである。この見解の隔たりは、出来るなら少しずつでも将来埋めていきたいと評者は考えている。

いずれにしても、本書が目録学門径の書として、幅広い層に推薦したい一冊となっている事実は動かない。本書を読んで、紀元前の書籍に関心を持たれた方は、まずは冒頭で触れた余嘉錫『古書通例』を、目録学に関心をお持ちの方は同じく前掲『目録学発微』に進まれることを、是非お勧めしたい。なお、古勝氏が主宰されている『文史通義』内篇の訳注は、京都大学学術情報リポジトリ(KUJEN)で内篇一と内篇二の(1)・(2)が公開されている。また章学誠には、より二劉の目録校讐学に対して直接的に論及している『校讐通義』もあるが、こちらは文教大学目録学研究会の訳注が、文教大学学術機関リポジトリ(BURS)で公開されている。

最後に本書が言及していない専著についても、何点か補足しておく。前述したように、本書の関心は一貫して「目録学の誕生」にある。おそらく下記の専著についても、古勝氏は承知の上であえて省いているのだろうが、本書読者のさらな

る手引きとして補記しておく。

孫徳謙『諸子通考』(岳麓書社、二〇一三年)。

孫徳謙『劉向校讐学纂微』(孫臨堪所著書)所収、一九三三年)。

孫徳謙『漢書芸文志举例』(二十五史補編)所収、開明書店、一九三六年)。

鄧駿捷『劉向校書考論』(人民出版社、二〇二二年)。

保科季子『漢代の秘書と校書事業』(日本秦漢史研究)一六、二〇一五年)。

【注】

ほかに劉向の校書や思想に対してまとまった言及をした論著として、内藤湖南「支那目録学」(『内藤湖南全集』第十二卷所収、筑摩書房、一九七〇年)や下見隆雄「劉向列女伝の研究」(『東海大学出版会』一九八九年)などがある。大陸の専著も含め、本書巻末の参考文献を参照されたい。就中、古勝氏は本書執筆に際して、徐興無『劉向評伝』(南京大学出版社、中国思想家評伝叢書、二〇〇五年)を多く参照しているように感じられた。

(あきやま・よういちろう 大阪府立大学)